

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	長野県
都道府県名	20

(√)

・学校名及び規模

中野市立中野小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	5	4	4	4	4	4	2	27	37	
児童数	145	150	155	145	131	154	8	888		

・実践研究の概要

<p>・主題（テーマ） 「子ども自らが、できた・分かった喜びを実感できる学習」 ～一人一人がのびる少人数学習の指導方法・指導形態・評価はどうあったらよいか～</p> <p>・テーマ設定の趣旨 大規模校であるので、少人数指導加配教員を活用し、算数科では習熟度別少人数学習集団を、国語科では少人数均等割り学習集団を基本として必要に応じて領域別学習集団等を組織しながら、一人一人にきめ細かな指導が行える指導体制作りを行おうと考えた。また、子どもが喜びを感じながら力を付けていく効果的な指導方法や教材開発、個の指導に生きる評価方法の開発を目指した。</p>

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

算数科では、年度当初に4～6学年全児童の「算数意識調査」「自己診断調査（学力検査）」を実施。その資料を基に習熟度別学習集団を構成した。

6学年を算数科実践推進学年として、指導体制、指導方法、評価等について得た成果を順次5学年、4学年の算数指導に取り入れた。

次のような職員の研究会を設け、研究推進や共通理解に努めた。

- ・少人数担当者打ち合わせ会（4～6年職員）
- ・学年研究の時間
（6年/算数，5年/国語，4・3年/総合的な学習，2年/生活，1年/国語）
- ・評価の学習会（全職員）

成果や課題を探るため、4学年以上の全児童に意識調査（4月，9月，3月），学力検査（4月，1月）を実施した。

() 実践研究の内容

個に応じた指導のための教材の開発

1 教科 算数

2 対象 6 学年 / (習熟度別) 繰り返しコース

3 単元名 『計算の見積もり』

4 教材の概要

- ・実際の面積を表す長方形 (長方形) とおよその面積を視覚的にとらえることができる長方形 (長方形) の紙を一人一人に配布。
- ・実際に辺の長さを測ったり, 重ね合わせて面積を比べたりすることで, 小数場面での見積もりの有効性を実感させることをねらった。

5 活用記録 (WR 児の姿から)

T : 長方形 を配る。「その長方形をじっと眺めてください。縦は何cmぐらいかな。横はどのくらいだと思いますか。」

T : 「縦横の長さを言います。ものさしを当てて確認してごらん。縦は29.7cmです。横は5.2cmです。どうですか。」

WR : ものさしを当てながら, 「いい。」とつぶやく。

学習問題

縦29.7cm, 横5.2cmの長方形の面積は, およそ何 cm^2 と見積もればいいでしょう。

T : 「縦横何cmと考えればいいかな。」

C 1 : 「縦は30cmです。」

WR : 挙手。「いいです。」と言う。

C 2 : 「横は5cmです。」

WR : すぐに挙手。「いいです。同じです。」と言う。

T : 「およその面積を求めてみてください。」

WR : $30 \times 5 = 150$ と, すぐに学習プリントに書く。単位はしばらくして cm^2 と書き足す。

T : 「できた人は手を挙げてください。」

WR : 指先を真っ直ぐ伸ばして挙手。

T : 「暗算でできた人は手を挙げてください。」

WR : 挙手

T : 「2つの長方形を比べてごらん。」長方形 (縦30cm, 横5cm) を配布する。

WR : 2つの長方形の縦1辺をまず重ねる。次に横の辺同士が重なるようにずらす。ぴったりと重ならない部分を目で追っている。

C 3 : 「ほぼ同じだ。」

WR : うなづく。

WR : 本時の最後に, 「やってみて, やり方とか式とかがわかりやすくできたようなきがする。」と学習カードに書く。

【考察】

WR児は小数の位取りや0の処理につまずきを持っている児童である。これは、数字からそれが表す実際の量や大きさをイメージすることができないためではないかと考えた。そこで数を目でとらえ、実際の長さや広さを確認できるようにしながら学習を進めることにした。

実際の長さを概数にする段階では、実際に辺の長さを測ってみることで、29.7cmは30cmに、5.2cmは5cmに近いことが分かり、見積もりの式も容易に立てることができた。苦手な小数のかけ算である 29.7×5.2 が 30×5 という計算しやすい式になり暗算で計算できた。実際の面積とおよその面積を比べる場面では、実際の 154.44cm^2 と概数の 150cm^2 の長方形を重ね合わせることで、両者は近い数であるということを目視的にとらえることができた。

() 成果と課題

- 1 ()の事例にあるように、算数科における習熟度別学習集団編制によるコース別学習は、予想される子どものつまずきや課題意識に合わせた教材開発や指導が工夫しやすく、習熟度が低い子どももできた・分かった喜びを感じながら、基礎的・基本的な内容を身に付けていくのに効果的である。
- 2 算数は、今後も習熟度別コース学習を行いながら、発展的な学習の効果的指導方法について引き続き研究していく予定である。

() 成果の普及方策

- 1 平成15年11月頃(期日未定)、公開研究会を実施する予定。